

卑弥呼と百枚の銅鏡



銅鐸



三角縁陳是作五神四獣鏡
西求女塚古墳(神戸市灘区都通)
(写真提供:神戸市教育委員会)

なぜ卑弥呼は、百枚もの銅鏡を送られたのか

卑弥呼という女王の存在、現在では畿内説が有力になってきているが邪馬台国の所在をめぐる九州説との長く続く論争は、古代史や考古学に興味を持つ人にとどまらず、多くの日本人を魅きつけている。実は卑弥呼と邪馬台国は、銅の歴史上でもなにかと気になる存在である。弥生時代に入ると出土する銅鐸には、なぜか破壊された形跡がある。また魏志倭人伝には、有名な金印の他に「百枚の銅鏡」が魏国より卑弥呼に送られたとあるが、なぜそれほど大量の銅鏡を送ったのか。折しも兵庫県立考古博物館では、大中遺跡発見50周年記念として『卑弥呼がいた時代』の特別展示が開催中である(昨年12月2日に終了)。銅鐸・銅鏡に隠された謎を解明するため、早速、専門家の意見を伺ってみた。



巨大な古墳の中へ「兵庫県立考古博物館」



大中遺跡の住居跡をもとに復元した卑弥呼の時代の住居

銅鐸は、破壊されて新たな道具に再生された

兵庫県立考古博物館の入口は古墳を模した形をしているが、一歩中に入るとモダンな建築アートというユニークなデザインだ。博物館前には卑弥呼の時代(弥生時代後期)の大中遺跡を保存する公園があり、幾つも住居跡が再現され、中には子どもたちの遊び場として開放されているレプリカもある。

「卑弥呼の時代は、日本史上はじめて文献(魏志倭人伝)と考古学(遺跡)が一致した時代なんです」と学術員の別府洋二氏。「邪馬台国はどこにあったのか!」という質問をぐっと飲み込み、まずはなぜ銅鐸が破壊されていたのかを尋ねる。

「弥生時代、多くの青銅器が中国から輸入され、また銅鐸などが国内で製造されていきます。これら青銅器はいままでこそ緑青で覆われていますが、製作時はきらびやかに輝いていたことでしょう。それは権力の象徴でもありました。ところがやがてこれらの銅鐸も打ち壊されていきます。破壊された銅鐸は溶かされて武器へと姿

を変えていきました。遺跡からは、銅鐸のかけらとともに、ふいごや鑄型、銅製の矢じりが出土しています」。時代が戦乱の世になると、飾り物の銅鐸よりも戦う武器が必要とされた訳だ。

「そして卑弥呼が幾多の国を束ねるようになると、今度は統治の象徴となる銅鏡へと姿を変えていったと考えられます」。破壊された銅鐸は、時代の変遷とともに人々の必要とするものが変わっていったことを物語っている。「中国では鏡はそんなに重きをおかれていませんでしたが、日本人は人の姿を映す神聖な物として銅鏡を扱いました。そのため卑弥呼の時代は、個人で大量の銅鏡を所有するという特殊な時代なんです」。



兵庫県立考古博物館
課長補佐 別府洋二氏

大量の銅鏡が出土すればそこが邪馬台国!?

「卑弥呼はとても鏡好きだったので、統治下の民たちも銅鏡を愛し所有していたようです。他の王の墓からは、銅鏡は埋葬品として出土しますが、この大中遺跡などからは住居跡からも出土します」と別府氏。だから魏国は卑弥呼に百枚もの銅鏡を送ったのだろうか。となれば魏国から送られたとされる銅鏡=三角縁神獣鏡が大量に見つかる場所こそが邪馬台国なのか?!

「残念ながら、そうとは断言できないんですよ」と別府氏は笑う。「カリスマ的な卑弥呼のパワーも齢を重ねるごとに弱まっていきます。そこで大陸の大国のお墨付きを貰うために魏国に使いを送るのですが、魏国はこれであなたの力を諸国に示しなさいと、鏡好きの卑弥呼にたくさんの銅鏡を送ったのです。しかも卑弥呼は魏国より送られた百枚だけでなく、もっと多くの銅鏡を手に入れて各地の豪族に鏡を大量に配っています。また中国から送られてきた銅鐸や銅矛を鑄直して銅鏡を製造しているようで、成分を調べて一致してもなかなか断定ができません」。さすがに邪馬台国の謎は、そんなに簡単には解けないようだ。しかし、破壊された銅鐸、百枚の銅鏡の謎は解明できた。そして当時の人たちにとって銅がいかに大切な存在であったのかはより実感することができた。